

## 「決戦投票の問題に就て」の解説

伊藤先生は、東京大学をご卒業後、名古屋大学理学部に助教授として赴任されるまでの間、内閣統計局にお勤めであったが、その時期のお仕事である。投票によって適任者を選ぶとき、まず予選投票を行って候補者を絞り、その候補者に対して決戦投票を行って適任者を選ぶことがよく行われるが、決戦投票の結果が予選投票の結果と著しく異なるとき、予選投票の結果を無視して決めてしまってよいか迷う事がよくある。そのような場合に予選投票の結果を決戦投票の結果にどう反映させて適任者を決めるのが合理的か、という問題が論じられている。この問題を、現代確率論の方法に従って、その正確な確率モデルを設定することで一つの解答を与えている。その際、必要になるのは条件付期待値という確率論の最も基礎的な概念ないし理論のみで、それ以上の高度の理論は必要としないが、得られた結果は大変興味深いものである。論文にとって、問題を的確に設定し、その定式化を正確に与えることが、その論文の価値を高める上で重要であることをよく示した好論文である。

この論文は戦時中の昭和 17 年、先生が二十代のときのお仕事で、若い読者にとっては読みにくい漢字が散見されるであろう。当時、小学生であった筆者でも、この論文の 1 ページ中程にある“偕て”と書かれているところは読めなかった。漢和辞典で調べて、これは“さて”と読むことが判ったので、念のため注意しておく。

渡辺 信三<sup>\*1</sup>

---

<sup>\*1</sup> 京都大学名誉教授